

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820053

研究課題名（和文）石垣島の相互行為の言語人類学的分析：言語・ジェスチャー・環境の接点を探る

研究課題名（英文）A linguistic anthropological analysis of interaction in Ishigaki: A quest for the intersection between language, gesture, and environment

研究代表者

武黒 麻紀子 (TAKEKURO MAKIKO)

早稲田大学・法学学術院・講師

研究者番号：80434223

研究成果の概要（和文）：石垣島（沖縄県石垣市）でのフィールドワークで収集したビデオおよび音声データをもとに、石垣市出身の話し手が自然会話とジェスチャーにおいて、どのように空間を表しているのかを考察した。フィールドワーク調査は、石垣島の様々な社会また空間環境で行った。その結果、石垣島出身の話し手の多くが東西南北の方位を用いた表現方法を高い頻度で使うことが分かった。具体的には、自然会話の言語使用においては東西南北を基準にした表現を使い、またジェスチャーの使用でも東西南北や位置関係に正確なジェスチャーが現れていた。しかも、石垣島話者は2つの空間指示枠（相対・絶対指示枠）をコードスイッチすることが明らかになった。話し手が好んで選択する空間指示枠は、コンテキスト特に聞き手の出身地や理解度に応じて瞬時に変化するものであることを例証した。また、ある空間指示枠の選択は、空間の言及指示や説明にとどまらず、グループ標識や参加者のアイデンティティをも指標することも指摘した。相互行為にみられる空間指示枠の使用が、話し手と聞き手（あるいは相互行為に参加する参加者）による間主観的な言語実践であると考察された。

研究成果の概要（英文）：Based on data from video-recordings collected during field visits to Ishigaki Island (the main island of the Yaeyama Islands, the southernmost of several island groups, making up the prefecture of Okinawa, Japan), this study explores how Japanese speakers of Isigaki-dialect express space in their speech and gesture. The study demonstrates that the description of cardinal directions in Ishigaki speakers' speech is frequently matched by and occurs with a parallel directional precision in their gesture. The geography of Ishigaki and housing structures seem to be related to the demand for directional accuracy in their speech and gesture. On this small island surrounded by the sea, the direction of the sea and the south often serve as crucial reference points for people's lives especially during the typhoon season. There is not only linguistic and gestural support but also geographic and support for directional accuracy among Ishigaki speakers. Furthermore, people in Ishigaki change the spatial frame of reference, according to their interlocutors' background. Thus, their use of spatial frame of reference is intersubjectively constructed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：言語人類学、相互行為、言語、ジェスチャー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2006年度に第1回博報「ことばと文化・教育」研究助成を受け、研究課題『日本語対面相互行為における言語・非言語のダイナミックな関わり』で、対面相互行為の中での言語やジェスチャー使用の分析に取り組んできた。本研究も上記の研究課題の延長線上にあり、これまでに大きく2つの視点から行ってきた研究—1)その場・その時に生み出される相互行為の分析、2)生活環境とのかかわりで考える言語・ジェスチャー分析—の融合と発展を、石垣島の地域社会での詳細なエスノグラフィをもとに試みた。

2. 研究の目的

目的は、石垣島の話者が相互行為の中で言語・ジェスチャーをどのように使うのか、それは環境や地域の習慣に何らかの影響を受けているのか、そこからどのような社会や人間関係が構築されているのかを明らかにすることであった。まず、世代や参与者関係の異なる地点で集めたデータをもとに、石垣島出身話者と観光客との相互行為は石垣島出身話者同士の相互行為とは言語やジェスチャーの使用に違いが見られるのかを探ろうとした。さらに、石垣島話者が空間を表すときの言語やジェスチャー使用を分

析し、参与者の位置関係が影響を与えているかどうか、同一人物でも社会状況(性別、聞き手の出身、年齢、出身地)によって、Levinson (2003)で提示された「空間指示棒」の使用が異なるのか、ミクロな相互行為場面(指示する空間の広さ、参与者がいる空間の広さなど)によっても異なるものなのかを探っていった。最終的に、相互行為と生活環境を結ぶ点として、地理、民俗文化、生活観を含めて考察した。

3. 研究の方法

沖縄県八重山諸島のひとつ石垣島でのフィールドワークから話者の日常の相互行為をビデオに収録し、そこで出てくる言語・ジェスチャーを分析した。相互行為参与者の生活空間である家やサービス場面(商店や市場)、観光協会をデータ収集地点とした。

分析と議論の焦点は、①相互行為の中の言語・ジェスチャーの使われ方、②異なる参与者間の人間関係の構図と言語・ジェスチャー使用の相違あるいは共通点、③空間に関する言語・ジェスチャーの使用と地形、地域の習慣、民俗文化など広く環境とのかかわりであった。

4. 研究成果

ここでは、石垣島での空間に関する言語

表現を分析した成果について述べたい。石垣島話者の多くが、大きな空間、例えば、島や自分のいる場所よりも離れた場所を示すときには絶対的指示枠に基づく言語表現を頻繁に使うことが分かった。市街地内における空間の位置関係を示すときには、海と陸との方向を「上下」の表現で、その「上下」を横切る方向を「東西」の表現で示していた。これは、土地の傾斜、南向きの家屋の構造、島の市街地を東西に横切る道路をもとに空間を感じ取ることが容易な環境であることがかかわっているためではないかと考えられる。一方、移動の際には相対的指示枠に基づく言語表現が使用されることが多かった。比較的広い空間内で、話者自身と目的地との空間配置を静的に把握する際には絶対的指示枠、移動中という動的な把握の際には相対的指示枠に基づく言語表現を使う傾向も強いようである。さらに、石垣市街地に住む人々の多くが、島外者に対しては相対的指示枠を使っていた。生活空間、指示対象物の可動性や相手の持つ地元地理の知識が、用いる空間指示枠の選択に影響を与えているともいえる。こうしたミクロな視野からの空間認知と言語のかかわりは、先行研究ではあまり議論されてこなかったが、フィールドワークを通じて、島の日常対面相互行為の中で空間認知を観察してみると、必ずしも、ある言語がある認知指示枠の使用を促すといった一枚岩的な見方では捉えきれないものであることが分かる。そこには、ある言語で可能な言語表現やある地域での地理・気候・文化・歴史的特徴、島に暮らす人々と他県からの観光客の関係、指示対象物の可動性などがかかわっていると考察された。

さらに、石垣島でのデータをもとに空間指示枠の選択が参与者構造の中から生まれ、

参与者の理解度や動向によっては話し手の選択する空間指示枠が変わっていく可能性が高いこと、それゆえに空間を他人に伝えるという行為がそもそも間主観的であることも明らかになった。言語の指標的機能に注目して空間指示枠の選択を分析してみると、空間指示枠を使うということは単に空間を描写するという命題の表現にとどまらず、ときに地域への帰属を示すグループ標識として、またときに地域の習慣や地理に長けているかどうかといった共同体への溶け込み具合やそこでのアイデンティティ標識として機能していた。ある空間指示枠の使用が場所や方角を指し示すだけではなく、コンテキスト(グループ標識や地元地理に詳しい参与者の背景など)をも同時に指標していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

武黒麻紀子「言語の間主観性—古くて新しいテーマに取り組むにあたって」2011. 『言語の間主観性—認知・文化の多様な姿を探る』武黒麻紀子編、pp.7-17. 早稲田大学出版

武黒麻紀子「間主観的に使われる空間指示枠とそれが指標するもの—沖縄県石垣島の事例より」2011. 『言語の間主観性—認知・文化の多様な姿を探る』武黒麻紀子編、pp.65-85. 早稲田大学出版

[学会発表] (計3件)

Makiko Takekuro. “Spatial descriptions and intersubjectivity.” 第3回日本英語学会国際春季フォーラム 2010年4月25日 青山学院大学

Makiko Takekuro. “Introduction to the workshop.” 第3回日本英語学会国際春季フォーラム 2010年4月25日 青山学院大学

Makiko Takekuro. “Honorification and linguistic ideologies” 第28回日本英語学会 2010年11月13日 日本大学

〔図書〕（計1件）

『言語の間主観性－認知・文化の多様な姿を探る』武黒麻紀子編 2011. 早稲田大学出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者 武黒麻紀子（早稲田大学）
研究者番号：80434223

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし